

舍利弗の入滅をめぐる諸傳承について

岩 井 昌 悟

はじめに 諸傳承はみな一致して釋尊の二大弟子である舍利弗と目連が釋尊よりも先に入滅したとする。しかしそれが釋尊の入滅に先立つことどれほどであったかは、諸傳承が錯綜しているため明確にしがたい。本稿は舍利弗の入滅の時期に關して、如何なる情報が存在し、何れの情報が何れの情報と食い違い、それぞれの情報がどのように關連し合っているかを明確にするため、諸傳承を整理することを目的とする。

Samyuttanikāya(SN)と『雜阿含經』の傳承 SN 47-13 (vol.V, pp.161-163), SN 47-14 (vol.V, pp.163-165) と、その對應經である『雜阿含經』638 (大正藏 2, pp.176b-177a), 『雜阿含經』639 (大正藏 2, p.177a-b) が、もっとも端的に釋尊の在世中に舍利弗(及び目連)が入滅したことを傳えている。SN 47-13 と『雜阿含經』638 は、Magadha 國の Nālagāmaka (摩竭提那羅聚落) で舍利弗が入滅し、その知らせをもって Cunda (純陀) 沙彌が舍衛城(『雜阿含經』は「王舍城・迦蘭陀竹園」とする)に至って釋尊に報告し、釋尊が阿難に自燈明・法燈明を説くというものであり、SN 47-14 と『雜阿含經』639 は、Vajji 國の Ukkacelā のガンガー河の岸(『雜阿含經』は「摩偷羅國・跋陀羅河側・傘蓋菴羅樹林」とする)において諸比丘に圍まれて〔布薩に際して〕露地に坐っておられた釋尊が、般涅槃したばかりの舍利弗と目連を悼み、諸比丘に自燈明・法燈明の説法をするというものである。

南方上座部の見解 しかしながらパーリの「大般涅槃經」(*DN 15, Mahāparinibbāna-s.*)は、釋尊が王舍城を出發して Ambalattikā から Nālandā に入った時に、舍利弗が登場して獅子吼する¹⁾。この Nālandā における舍利弗の登場と上記の SN の記事を關連づければ、舍利弗の入滅は必然的に釋尊が王舍城から最後の遊行に出發してから Kusinārā で入滅するまでの間に位置づけられることになる。また釋尊が Cunda 沙彌から舍利弗入滅の知らせを受けるのが舍衛城であるため (SN 47-13)、最後の遊行の途上で釋尊は涅槃經に記述のない舍衛城に滞在しなければならない。DN 註 (Sv) や SN 註 (Spk) はこれを以下のように説明する。

釋尊が Beluva 村における雨安居の間に病にかかる。つづいて釋尊は乞食の爲に Vesāli に入り、それから阿難をつれて Cāpāla-cetiya に赴く。Sv はこの「乞食のために Vesāli に入った」いう聖典の文句について、それを「Ukkacelā を出發して Vesāli に入った時である」とし、それについて以下のように詳細を述べる。

釋尊は Beluva 村で雨安居された後、舍衛城に赴く。その時舍利弗は、主要弟子が佛よりも先に入滅すべきこと、さらに自身の壽命が7日で盡きることを知る。釋尊に最後の別れを告げ、侍者の Cunda と他の 500 人の比丘衆を従えて Nālakagāma に赴き、母親を教化して預流に導き、病にかかって自身の生まれた部屋 (jāto-varaka) で入滅する。Cunda は舍利弗の遺骨を舍衛城にもたらし、舍利弗の入滅を阿難と釋尊に伝える。釋尊は dhātucetiya を建立させる。それから釋尊は舍衛城を出て王舍城に赴き、そこで目連が入滅し、そこに目連の dhātucetiya を建立させる²⁾。王舍城から出發して Ukkacelā のガンガーの岸邊で舍利弗・目連の涅槃を悼み、Ukkacelā から出發して Vesāli に入る³⁾。

なお、SN47-14 の註釋には舍利弗の入滅を kattika 月の満月の日、目連の入滅の日をそれから半月後の黒分の布薩の日とする⁴⁾。またこれは「釋尊の入滅の年」である⁵⁾。

要するに南方上座部のアッタカターによれば、釈尊が Beluva 村の雨安居を終えてから Kusinārā に向けて出發するまでの間に舍衛城から王舍城まで一回りされ、その間に舍利弗・目連の入滅を位置づけるのである。

『增壹阿含經』の傳承 以下に『增壹阿含經』26-9 (大正藏2, pp.639a-643a) の傳承を見る。

舍衛城の祇園精舍にいた釋尊が舍利弗・目連とともに王舍城に赴き、竹林精舍 (迦蘭陀竹園) で雨安居に入る。目連が王舍城で執杖梵志に襲撃され、舍利弗に自身が涅槃に入ることを伝える。舍利弗は釋尊のもとに行き、自身が先に入滅する許しを得る。それから舍利弗は「本生之處」である摩瘦國に赴き⁶⁾、入滅する。舍利弗の滅後、それを看取ったチュンダ沙彌が舍利をもたらし阿難と釋尊に舍利弗の入滅を伝える。目連も釋尊に許しを得て、王舍城から本生處の摩瘦村に行行って滅度する。釋尊は 500 人の比丘とともに王舍城から那羅陀村へ至り、露地に坐って舍利弗と目連を悼む説法をする。

目連と舍利弗が「久しからず世尊が般涅槃を取るのを見るに忍びない」と述べていることから釋尊の入滅に近いことを伺わせる。パーリの「涅槃經」で釋尊が王舍城から Nālandā に至ることと関係があるとすれば、これは涅槃經の遊行の出

發直前に舍利弗・目連の入滅を位置づけたものと捉えることが可能である。

『根本有部律雜事』の傳承 『根本有部律雜事』(大正藏 24, pp.287a-) に以下の記事が見られる⁷⁾。

舍利弗(舍利子)と目連(大目連)が無間地獄に赴き、そこで苦しむ道の師に會う。王舎城に歸り目連が地獄で見聞きしたことを外道らに述べて死に至る暴行を受ける。舍利弗は目連よりも先に入滅することを決めて、世尊や他の長老に別れを告げて、侍者のチュンダ沙彌(求寂準陀)をつれて諸比丘とともにマガダ國を遊行して Nālada (那羅陀: na lang da) 村⁸⁾に至り、無餘涅槃に入る。その後、目連は林園聚落 (kāṣṭhavāṭa-grāmaka⁹⁾: grong khyer shin thags can) で入滅する。チュンダ沙彌は舍利弗の遺骨と衣鉢を持って王舎城に至り、阿難と釋尊に舍利弗の入滅を伝える。釋尊はそれから王舎城を出發して舍衛城の祇園精舍(室羅伐城給孤獨園)に至る。釋尊は給孤獨に舍利弗の遺骨を供養させる。プラセーナジト(勝光)王、マツリカー(勝鬘夫人: 'phreng ldan ma) とも給孤獨のところをたずねて供養する。給孤獨が所用で出かけている間に門を閉じたため、供養に來た人々から非難が出て、釋尊が塔(窣覩波: mchog rten)の建立を許す。

『雜阿含經』と『根本有部律』の傳承の關連 ここで『雜阿含經』639 において釋尊が舍利弗・目連の入滅を悼む地が「摩偷羅國・跋陀羅河側・傘蓋菴羅樹林」であることに注目したい。釋尊が「摩偷羅國」に滞在したという記事は『雜阿含經』の以下の三經に見出される。

『雜阿含經』36 (大正藏 2, p.8a-b): 説處は「摩偷羅國跋提河側傘蓋菴羅樹園」。自燈明・法燈明を説く。

『雜阿含經』604 「阿育王因緣經」(大正藏 2, p.165b): 「上座(耶舍)答曰。佛臨般涅槃時。降伏阿波羅龍王。陶師。旃陀羅。瞿波梨龍。詣摩偷羅國。告阿難曰。於我般涅槃後。百世之中。當有長者。名瞿多。其子名曰優波掘多¹⁰⁾。」

『雜阿含經』640 (大正藏 2, p.177b): 「爾時世尊告尊者阿難。此摩偷羅國。將來世當有商人子。名曰掘多。掘多有子。名優波掘多」。Upagupta (優波掘多) 出現の予言。

この三經の中、『雜阿含經』の 604 と 640 の「摩偷羅國」は明らかに Mathurā 國の音寫であるが、『雜阿含經』36¹¹⁾の「摩偷羅國」はマガダ國內の Mātulā のことであると考えられる。この『雜阿含經』36 に対応する内容の記事が「根本有部律」の「藥事」に見出され、『根本有部律藥事』(大正藏 24, p.37b) では「于時世尊又到摩都量城。相應住中。廣説其事同様」と示されるのみであるが、Tib. 譯では略されずに「*ma thu la* の *rab tu bzang ldan* (= Bhadraka?) という名の河の岸にある *slob pa rnams* (= ?) のアームラ林」という地が示されている¹²⁾。しかもこのすぐ前

の記事で釋尊はマガダ國の Kimbilā に滞在している¹³⁾。そして「自燈明・法燈明」を説く DN 26 ‘Cakkavattisihanāda-s.’ (vol.III, pp.58-79) の説処がマガダ國の Mātulā である¹⁴⁾。

ところで『根本有部律』には涅槃經關係の記事が二種あり、一つは『根本有部律雜事』(大正藏 24, pp.382b-402c) のもので、これは梵本の涅槃經 (MPS) (ed. Ernst Waldschmidt, T. 1-3, Berlin 1950-1951) とほぼ一致している。もう一つは『根本有部律藥事』(大正藏 24, pp.19b-) に見出される擬似涅槃經記事とも呼ぶべきものである。ここでの釋尊の出發の動機は Vaiṣālī の疫病の鎮靜¹⁵⁾ と Apalāla (無藁, 阿鉢羅, 無稻文) 龍王の降伏¹⁶⁾ であるため、阿闍世王が Vaiṣālī を攻略せんとしていたとする發端を有する諸涅槃經とは異なるが、釋尊の道程および事績がよく一致する。

王舍城から出發して竹林村での雨安居中に病にかかる (pp.29c-30a) までは梵本 MPS とよく一致し、ここから釋尊は Mithilā (彌替羅) 村などに赴いているが、再び涅槃經の道筋に戻り、Pāpā¹⁷⁾ (p.30c) を経て Kuśinagarī (拘尸那城) に至る。ここで釋尊は娑羅雙樹を指差しながら阿難に「久しからずしてこの林の下で般涅槃するであろう」と告げるが (p.31b), しかし釋尊はここで入滅せずに処々に遊行し、摩都量城 (=Mātulā) において「自燈明・法燈明」を説く段に至る¹⁸⁾。このかなり後に『雜阿含經』604 にも示される Apalāla 龍王などの降伏 (pp.40c-), そして Mathurā (麼土羅, 末土羅) における Upagupta (近密) 出現の予言 (p.41c) が語られる。ただしこの遊行の結末ははっきりせず、どのように釋尊の入滅に接続するのか全く不明である。

ここには舍利弗・目連の入滅は語られていないが、『雜阿含經』639 において釋尊が舍利弗と目連の入滅を惜しむ地が Mātulā とされるのはこの記事と無關係ではないと思われる¹⁹⁾。この推測が妥當であるなら、有部系の傳承は涅槃經の遊行を Kuśinagarī より先に引き伸ばし、釋尊入滅までの間に舍利弗・目連の入滅を位置づけたように思われる。

まとめ 南方上座部の舍利弗入滅傳承の無理は、パーリの涅槃經中に舍利弗が登場することがその最たる因と思われる。北伝系の涅槃經には舍利弗が登場しないため、舍利弗入滅の時期を涅槃經と関連づける必然性は皆無である。それにもかかわらず『增壹阿含經』や「根本有部律」の傳承に涅槃經との関連が垣間見えていることには注意を払う必要があろう。詳細な検討は後を待ちたい。

以上に示した諸傳承の異同を表で示せば以下ようになる。

	パーリ	雜阿含	有部律	增壹阿含
舍利弗入滅地	Nālaka 村 (Upatissa 村)	那羅聚落	Nālada 村	摩瘦國
舍利弗入滅の報告	舍衛城	王舍城	王舍城	王舍城
舍利弗塔	舍衛城	不明	舍衛城	那羅陀村? ²⁰⁾
目連入滅時の 釋尊の所在 ²¹⁾	王舍城	不明	王舍城	王舍城
舍利弗・目連 入滅を悼む	Ukkacelā	摩偷羅國	不明	那羅陀村
舍利弗入滅の時期 と涅槃經との関連	釋尊 Beluva 村の 雨安居の後	不明	Kusinārā 以降?	最後の遊行 出発直前?

- 1) *Dīghanikāya* (DN) 15 (vol.II, p.81). この記事は諸涅槃經の中、パーリだけに存する。北伝系では舍利弗は登場しない。なお同様の舍利弗の獅子吼は DN 28 (vol.III, pp.99-116), 『長阿含經』「自歡喜經」(大正藏 1, p.76b-79a), 『信佛功德經』(大正藏 1, p.255a-258a), SN 47-12 (vol.V, pp.159-161), 『雜阿含經』(大正藏 2, pp.130c-131a) にも記述がある。
- 2) cf. *Jātaka* 522 (vol.V, pp.125-127), *Dhammapada* 註 (vol.III, pp.65-67).
- 3) Sv (vol.II, pp.549-554) と Spk (vol.III, p.212-221). 後者は SN 47-13 の註釋. 内容はほぼ同様である。
- 4) Spk (vol.III, p.225). なお *Jātaka* 95 (vol.I, p.391) によれば目連の入滅は kattika 月の黒分である。
- 5) Spk (vol.III, p.213) : katarasmiṃ kāle ti? bhagavato parinibbānaṣaṃvacchare.
- 6) 「摩瘦」の原語は不明である。舍利弗の生地については『根本有部律出家事』では「那羅村」(大正藏 23, p.1022b) とされ, *Mahāvastu* (Mvu) (ed. Émile Senart, 3 vols., Paris 1882-1897, vol.III, p.56) では 'Nālandagrāmaka', *Aṅguttaranikāya* 註 (vol.I, p.155) では 'upatissagāma' とされる。根本有部律梵本の Pravrajyāvastu の斷簡では 'Nālada-grāmaka' である。cf. Claus Vogel and Klaus Wille, 'Some More Fragments of the Pravrajyāvastu Portion', *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, Zweite Folge, Göttingen, 1992, p.95.
- 7) Tib. 北京版 *bka' gyur*, 'dul ba, De 224b/1-233a/6. ただし漢譯とチベット譯はかなり異なっている。部分的には漢譯の方が詳細を述べる。今は漢譯に従って梗概を示す。
- 8) Tib. 譯は na lang da につくる。しかし注 6 を参照のこと。
- 9) 「林園聚落」は『根本有部律出家事』(大正藏 23, p.1023c) にも見られ, その箇所に對應する梵本斷簡から原語を確認できる。Claus Vogel and Klaus Wille. op.cit., p.81.
- 10) これに対応する記事としては *Dīvy* 26, Pāṃśupradhānāvadāna (p.348) に yadā bhagavān parinirvāṇakālasamaye 'palālanāgaṃ viniya kumbhakāriṃ caṇḍāliṃ gopāliṃ ca teṣāṃ mathurāṃ anuprāptāḥ とあり, また『阿育王傳』(大正藏 50, p.102b), 『阿育王經』(大正藏 50, p.135b, 149b) にも同様の記事がある。また『阿育王經』(大正藏 50, p.150a) には「是時世尊以法藏付摩訶迦葉及天帝釋四天王等竟。復往摩偷羅國。如是次第至拘尸那城娑羅雙樹間。

告阿難言。涅槃時至」とある。

- 11) なおこの經は *SN* 22-43 (vol.III, pp.42-43) に對應する。そこでは説處を舍衛城とする。
- 12) 北京版 *bka'* 'gyur, 'dul ba, Ge 92a/6-7 : *sangs rgyas bcom ldan 'das ma thu la na 'bab chu rab tu bzang ldan zhes bya ba'i 'gram slob pa rnams kyi a mra'i tshal na bzhugs so*。因みに Tib. 律における Mathurā の譯語は 'bcom brlag' である。
- 13) 漢譯は「重毘羅聚落林」とするが「金毘羅」の誤りであろう。ここで説かれる内容は漢譯では略されているが、Tib. 譯の内容は『雜阿含經』813 (大正藏 2, p.208c) と *SN* 54-10 (vo.V, p.322) が対応する。
- 14) 『長阿含經』6「轉輪聖王修行經」(大正藏 1, p.39a-42b) では「摩羅醯搜」の「摩樓國」とされる。なお釈尊が「自燈明・法燈明」を説くのはその入滅にあたってのことと思われるため、この經もそれを予想せしめる。
- 15) 阿闍世王 (またはビンビサーラ王) の請いにより、王舍城で雨安居に入ろうとしていた釋尊が疫病を鎮めるために Vaiśālī に赴く記事は諸所に散見される。王を阿闍世とするものは『增壹阿含經』38-11 (大正藏 2, pp.725b-728a), 『菩薩本行經』(大正 3, pp.116c-120c), 『除恐災患經』(大正藏 17, pp.552a-557b) であり、ビンビサーラとするものは *Mvu* (vol.I, pp.253-301), *Suttanipāṭa* 註 (vol.I, p.278), *Dhammapada* 註 (vol.III, pp.436-449) のものである。
- 16) 『根本有部律藥事』(大正藏 24, p.21c) において阿闍世王が釋尊に Apalāla 龍王の調伏を願ひ出ている。このことは少なくともこの龍王が調伏される (pp.40a-) までは一連の物語であることを示すため、重要である。
- 17) Tib. 譯による。漢譯は「彼城」。
- 18) この記事の直前に釋尊が「一邊地聚落」において目連を遣わして、目連の舅を教化させる段があり、そこまでは目連が生存していることになる。
- 19) また *Mvu* (vol.I, pp.253-301) に記述される Vaiśālī の疫病の物語が Āmrāpālī のアームラ林の布施へとつながることも、この擬似涅槃經記事と涅槃經との関連を示唆するか。
- 20) ただし、釋尊が那羅陀村で塔の建立を指示したことは明らかであるが、塔が那羅陀村に建立されたとは明記されていない。
- 21) 舍利弗の入滅について記さないためここでは取り上げなかったが、『鼻奈耶』(大正藏 24, pp.857c-) が、目連の撲殺事件の際の釋尊の所在を「舍衛國・祇樹給孤獨園」とする。

〈キーワード〉 舍利弗, 目連, 涅槃經

(東洋大学非常勤講師, 博士 (文学))

its, probably carved between the 2nd and 3rd centuries in Mathurā, where the Sarvāstivāda school was influential.

71. The Newari Buddhist Manuscripts copied by Ratnamuni Vajrācārya in Lhasa, Tibet

Kazumi YOSHIZAKI

The Asha Archives (Asha Saphu Kuthi) in Nepal has a collection of Sanskrit and Newari manuscripts about 5,300 in number. In this collection, according to the colophons, I discovered 37 mss. commissioned by Newari traders or artisans who had lived in Tibet (Yoshizaki, “The Modern Newari Buddhist Manuscripts copied in Tibet — from the Collection of Asha Saphu Kuthi, Kathmandu, Nepal,” forthcoming). Of these mss., 6 or 7 mss. were copied by Ratnamuni Vajrācārya in Lhasa. In the first half of his life he was a priest of Sikhamu Bahā (Tarumūla Mahāvihāra) of Kathmandu, and he copied 2 mss. dated Newari Samvat 983 and 991. But in his later life, between Newari Samvat 991 and 1001, he proceeded to Lhasa to engage in the business of trade with Tibet. And at least for 12 years he stayed in Lhasa, keeping his habit of copying Buddhist mss. as in the Kathmandu days. Then it seems that later in Lhasa he changed his position from businessman to priest for the Newari merchants in Lhasa (Yoshizaki, “The Vajrācāryas in the Newari Merchant Associations in Tibet [Pālās],” forthcoming). He was one of the typical men who intended to maintain the Newari culture in Tibet.

72. The Traditions Related to the Parinibbāna of Sāriputta

Shōgo IWAI

In the Nikāyas and the Chinese Āgamas it is a fixed tradition that Sāriputta and Mahāmoggallāna, the two great disciples of Sakyamuni, entered parinibbāna earlier than their Teacher. But it is not clear how long before the Teacher’s parinibbāna this took place. For example, according to the Pali tradition, Sāriputta actually appears in the *Mahāparinibbānasuttanta*; therefore

it is necessary that Sāriputta's death should have taken place on the way of Buddha's last journey from Rājagaha to Kusinārā. But in one of the suttas of *Samyuttanikāya* Sakyamuni is informed of Sāriputta's death when he stays in Sāvattihī, which he does not visit on his last journey. Although the commentator avoids this contradiction by assuming a lacuna in the description of the *Mahāparinibbānasuttanta*, we can hardly accept this idea.

This paper intends to clarify the various intricate traditions related to the death of Sāriputta found in the Pali scriptures and its commentaries as well as the Northern traditions i.e. those of *Samyuktāgama*, *Ekottarāgama* and *Mūlasarvāstivādinaya*.

73. A Study of the *Kāraṇḍavyūha*: differences between the Mette edition and the Samasrami edition

Ruriko SAKUMA

The Mette edition of the *Kāraṇḍavyūha* presents differences between the Gilgit Manuscripts and the Samasrami edition (reprinted in the Vaidya edition). This paper focuses on the stories about the six-syllable formula (*om maṇipadme hūṃ*) and the *maṇḍalas* about Avalokiteśvara in those editions, and points out that as far as the discussed portions are concerned, the latter edition seems to present a more stressed expression of the six-syllable formula and more *tantric* aspects than the former.

74. “netti” and the “Nettipakaraṇa”

Ken'ichi FURUYAMA

In this short article, I treat the discussion between Arabinda Barua and Bhikkhu Ñāṇamoli concerning the positioning of the *Peṭakopadesa* and *Nettipakaraṇa*. Arabinda Barua said that the *Nettipakaraṇa* is earlier than the *Peṭakopadesa* because the word “netti” appears in the *Peṭakopadesa*. He considered the word “netti” to indicate the *Nettipakaraṇa*. To this claim, Bhikkhu Ñāṇamoli said that the word “netti” is a noun, not a proper name.